



重量挙げ56キロ級で インターハイ、国体ともに完全制覇



艾 幸太さん(岩谷堂高校3年)

2011年8月の北東北インターハイではスナッチ、ジャーク、トータルと完全制覇を遂げ、続く10月の山口国体でもスナッチ、ジャークで優勝し、堂々の全国大会2冠に輝きました。「努力」をモットーに積み重ねてきた厳しい練習があったからこそその栄冠で、若い力が震災後の復興にかける県民に喜びを届けました。

地元の応援が力になった

8月4日に行われた北東北インターハイは、地元の江刺中央体育館が会場でした。自分が優勝できたのは、地元の応援があったからだと思います。会場は学校から歩いても30分足らずですから、先生方やクラスの友達も応援に来てくれたり、補助員も同じ高校の生徒たちで、クラブの後輩たちもみんな前の席に陣取って、声援を送ってくれました。両親も陰のほうでそっと応援していたと、後で担任の先生から聞きました。

今年は春に東日本大震災があり、石川県で行われる予定だった全国選抜大会も中止になりました。インターハイは地元での開催。震災で沈んでいる岩手の皆さんに、自分が勝つことで1つでも明るいニュースを届けられたらという思いで試合に臨みました。

優勝はスナッチの2本目、94キロを挙げたときに確信しました。1回目を失敗し、2回目も自分としては肘が曲がったような気がしたけれども、成功のランプがついて「ヨシッ」と。地元だからこそ自分も絶対に優勝したかった。2年生のときのインターハイは入賞できると期待されながら、怪我で出られなかつた。現地入りしたけれども試合に出られなかつたんです。それがとても悔しかつた。

今回も大会直前の7月の合宿で腰を痛めてしまい、重いバーベルには触っていなかつたんです。決して万全の態勢ではなく、不安を抱えての出場だったのです。試合の前の日は緊張でよく眠れませんでした。

3つのメダルを胸にかけてもらったときは重かった

ですね。正直、表彰台に上ったところまでは覚えてるんですが、後の記憶がないんです(笑)。夢の中にいたのかもしれない。優勝できて、1年生の時からずっと指導してくれた小野先生や先輩たちに少しは恩返しできたかなと思います。



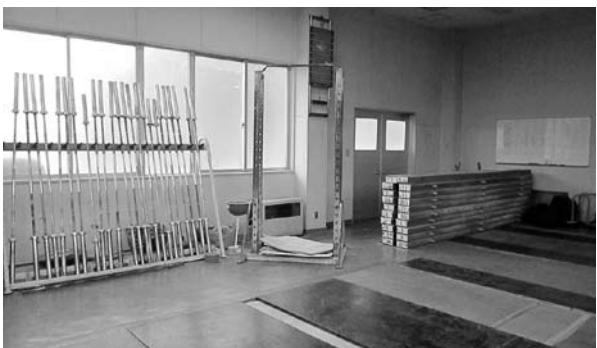
プレッシャーを楽しむ

2ヵ月後の山口国体は、少し空気が思ひように感じました。インターハイでの優勝もあるので、周囲の期待も大きくて必ず優勝しなければならない。プレッシャーは半端ではなかった。でも、自分はプレッシャーを感じると逆に楽しくてしょうがないんです。試合を楽しんでやろうと思いました。

本当は1ヵ月ほど前に今度は股関節を痛めてしまい、115キロ以上の重量は挙げていませんでした。アップ場では動きが悪かったけれども、試合になつたら調子が良くなつて、思ったより軽く感じてスナッチは自己記録(98キロ)を上回る99キロに成功しました。ジャークは122キロに挑戦したんですが、痛めた場所が持ちこたえられなくて落としてしまい、記録は119キロ。でも、トータルはインターハイを6キ

口上回る218キロでした。

会場には「がんばれ！東北」の垂れ幕が掲げてあり、それも奮起の材料になりました。国体はメダルはありませんが、高校生活最後の大きな大会でいい記録を出せて良かったと思います。



先輩たちの活躍を目標に

中学時代は陸上の短距離をやっていました。ウエイト部に入ったのは、入学式のときに顧問の小野先生から「君は立つ姿勢がいい。ウエイトリフティングをやらないか」と、声を掛けられたのがきっかけです。体験で来てみたらゴツイ人たちはかりで圧倒されましたが、別に入りたいクラブもなかったので迷いはありませんでした。

部室に張ってある過去の新聞記事や先輩達の名札を見て、岩谷堂は重量挙げで素晴らしい成績を上げてきた伝統ある土地であることがわかつてきました。一緒に入部した同級生は途中で止めてしまったので、1年生は自分1人でしたが、とにかく先輩たちの練習についていけば強くなれる、先輩たちのように全国で活躍できると思って練習に励みました。階級の違う先輩たちと練習すると鍛えられますし、先輩たちに教えてもらいながら、今の自分のフォームも見つけることができました。

中でも目標にしたのは、平成18年の国体で同じ56キロ級で優勝した三嶋平先輩。自分も三嶋先輩のようになりたい、そのためにはまずは県一になって全国を目指そうと、努力を重ねてきました。練習は大好きで、止めたいと思ったことは一度もありません。モットーは「努力」の一言。努力すれば、必ず結果はついてくると思います。

将来は世界で戦いたい

自分の強みは瞬発力だと思っています。中学時代に短距離をやっていたことが生きているかもしれない。反対に課題は2年の時に腰を痛めてから今も弱点になっていること。腰回りをもっと強くしなければなりません。普通、3年になると記録がなかなか伸びなくなるんですが、自分は3年になってから5キロ伸びました。その時、日本一になれるかもしれないという手ごたえを感じることができました。3年になってから、ウエイトリフティングという競技も、試合も楽しくなりました。だから、後輩たちには自分のペースで、自分らしく頑張れと言いたい。まだまだ努力も練習も足りないように思うのです。

自分はウエイトリフティングという競技を通して、視野を広げることができました。全国各地に行くことができたし、一緒に表彰台に並んだ選手たちと情報交換したり、合宿でほかの高校や県外の選手と友達になることもできました。それが一番良かったと思います。

卒業後は東京の大学に進みます。大学は全国から強い選手たちが集まってくると思うので、その中で揉まれ、鍛えられてもっと記録を伸ばしたい。そして20歳までに全日本ジュニア選手権で1位をとり、世界ジュニア選手権に出ることが、これからの中目標です。



表彰式で賞状を頭の上に掲げ、喜びの笑顔を見せる艾幸太(岩谷堂高)
=下関市・山口県国際総合センター
(岩手日報2011年10月9日付)